民報サロン

未来に繋ぐ一歩

近藤　有美

私は家業以外にも白河青年会議所に所属し活動している。私の憧れる女性経営者・石川格子さんのお誘いがきっかけだった。

2013（平成25）年に家業に入社してからというもの、営業マンとしてのスキルは増える一方で後継者として必要な器の形成が不十分であることに不安を感じていた。そんな時に「若手リーダーが学び、地域発展のために活動している青年会議所という会があるから試しに参加してみない？」とお声がけいただいた。どこかで生まれ育った街に貢献したいという気持ちがあり、父がロータリークラブで奉仕活動をしている姿を見てきたので、興味はとてもあった。

初めて参加させてもらった講演会では学びの多さに感激したが、それ以上に企画から設営までの全てをメンバーだけで作り上げたことに驚いた。全員が仕事を持ちながら活動し、自信にあふれて話す姿を見て、「自分はここでなら成長できるかもしれない！」と思い2017年に入会した。

青年会議所は単年度制で1月から12月で組織が変わる。私が本格的に活動を始めたのは2018年だった。白河エリアばかりでなく、日本青年会議所や県内会議所を統括する福島ブロック協議会などに出向し、同世代の人たちと地域課題に取り組むこともあった。若手の私に先輩方は多くの機会をくださり、今まで経験できなかった人のまとめ方や検証の仕方など、会社を運営するための基本をたたき込んでもらうことができた。

失敗して落ち込むこともあったが、挑戦させてもらえたからこそ成長できたと実感できた。真剣に取り組めば取り組むほど、自分の糧となり自信がついた。大切な仲間や先輩が増え、それと同時に「自分もこんなふうになりたい」と思える人も増えていった。

2021年、理事長をサポートして会の運営の要となる専務理事という職務が決まった直後に妊娠が分かった。白河青年会議所では今まで例がない妊婦専務理事となった。異例であるにもかかわらず、無理のない範囲で活動させてくれた。家族や会社の仲間、会議所メンバーがフォローをしてくれたおかげで、産休・育休を経て復帰し、最後まで専務理事の職務をまっとうすることができた。

青年会議所は20歳から40歳までしか活動できない。同時にその期間は出産と育児に差しかかる大切な時期でもある。若手リーダーとして地域をけん引することも、仕事の知識や技術力をつけることも、挑戦も失敗も、経験値を上げる大切な時である。もちろん、これからの未来のために歩みを止めることはないし、出産や育児がハンディに感じるような環境であってはならない。昨今はウェブ会議が浸透していることもあり、育児で手が離せない時でも参加しやすくなった。青年会議所もベビーファースト宣言を行い、育児支援制度も広がってきたので、子育てしながら活動しやすい環境となっている。

とはいえ、実績が少ない現状ではあるので少しでも自分の行動が未来につながることを願い、これからも一歩ずつ進み続けていきたい。

（中島村滑津、フジ機工社長）